

# DVD「エレーヌへの讃歌」について（解説）

(HOMMAGE A HELENE)

2017年（平成29）1月16日

- |                           |                   |
|---------------------------|-------------------|
| 1 はじめに                    | 8 マルセル・ジュグラリス氏のこと |
| 2 エレーヌ・ジュグラリスのこと          | 9 音楽：三木 鶏郎氏のこと    |
| 3 能「羽衣」とは                 | 10 編集：伊勢 長之助氏のこと  |
| 4 「羽衣の碑」建立のいきさつ           | 11 撮影：八幡 治夫氏のこと   |
| 5 1952年(昭和27年)11月1日(土)除幕式 | 12 マルセル氏の死        |
| 6 「羽衣の碑」の顕彰事業 その後         | 13 おわりに           |
| 7 この映画が作られたきっかけ           |                   |

## 1 はじめに

これは、1952年（昭和27）11月1日（土）、旧清水市三保、「羽衣の松」前で開催された「エレーヌ夫人羽衣の碑除幕式」を撮影した35ミリフィルムをDVD化したものです。

フィルムは、モノクロで6分25秒です。

企画・制作は、エレーヌの夫、マルセル・ジュグラリス氏。（以下、「マルセル氏」と記します。）

ナレーションも、マルセル氏自身の肉声と思われれます。音楽：三木 鶏郎氏、編集：伊勢 長之助氏、撮影：八幡 治夫氏。（エンドマーク(F I N)後のクレジットより）

マルセル氏は、私費でこの映画を制作し、翌1953年（昭和28）1月3日、このフィルムを旧清水市に寄贈しました。

マルセル氏は、2010年（平成22）2月5日（金）、パリで87歳の生涯を閉じました。

「羽衣の碑」が建立されてから60年。除幕式で上演された能「羽衣」は、「三保薪能」として現在に受け継がれています。

この映画は、亡き妻に捧げたマルセル氏の映像オマージュ（讃歌）であるとともに、「三保薪能」の原点ともいべき除幕式を記録した彼からの贈りものです。

また、この映画の著作権者はマルセル氏ですが、商業映画とは性格が異なる記録映画であり、著作権を含め公開を前提に旧清水市に寄贈されたと推察されます。したがって、この映像・解説を無断で使用することはご遠慮くださるようお願いします。

## 2 エレーヌ・ジュグラリスのこと



エレーヌ・ジュグラリス (32歳)

1949.3月:リュシアン・エルヴェ撮影

エレーヌ・ジュグラリスは、1916年（大正5）4月23日、フランスのブルターニュ地方カンペールに生まれました。幼少の頃、著名な舞踊家イサドラ・ダンカンに師事し新しいスタイルの野外ギリシャダンスを発表。その後、シャルル・デュランと共に演劇を学び、音楽、絵画、演出法をジャン・ルイ・バロー、マリ・イレーヌ・ダステ等の演劇人によって創設された組織であるEPJDで身につけ、全ヨーロッパで公演旅行を行いました。

この頃、日本の「能」と巡り会い、これが世界で最もシンプルで完璧な演劇であることに心を打たれ、以来、能楽と日本文化の研究に全精力を傾けました。

エレーヌの「能」研究は、1941年（昭和16）頃から始まりましたが、第二次世界大戦中のフランスでは、能に関する文献や日本研究家は少なく、

独学での研究は困難を極めました。しかし、頻繁に通ったギメ美術館の図書室で、傑出した日本研究者であり能の翻訳者のルノンド氏とジョルジュ・ボンマルシャン氏に出会い、彼らから能に関する当時手に入れられる限りの資料を収集することができました。その中から謡曲「羽衣」を選び、苦勞の末、忠実な翻訳を完成させました。楽器・衣装等を探し、奔走の末ペルシー劇団の一座を編成し、1949年（昭和24）の始め、シャンゼリゼの劇場でデビューを飾りました。この初舞台を見た東洋学者ルネ・グルゼ氏の招きで、この年の3月28日、ギメ美術館で能「羽衣」が上演されました。

この公演は大成功をおさめ、ル・モンド紙、フランスプレス通信、アール紙の各紙は広いスペースを割いてこれを報じ批評家の絶賛を浴びました。その後も精力的に公演が行われましたが、この年の6月、エレーヌは劇場での公演中、最後に天女が舞いながら消えてゆく場面で倒れました。白血病でした。

そして1951年（昭和26）7月11日、故郷ブルターニュで35年の短い生涯を閉じました。

#### ★ エレーヌとマルセルとの出会い ～ 彼女とわが子の死 ～

1984年（昭和59）5月10日 夏目 四日二（しかじ）氏との対話より抜粋（マルセル氏 62歳）

羽衣まつり二十周年記念誌※〔2003年（平成15）10. 10発行〕より

以下、※は、静岡市立図書館の所蔵資料です。

妻エレーヌは、アルメニア人で、両親はトルコとの戦争で多くの人が殺された時、国を離れ、スイスを経てフランスに定住したのです。才気煥発な青年であった父オブナニアンは、18歳にしてすでに著名な詩人であり、後に医学を修め、その患者の中に「現代舞踊の母」といわれるイサドラ・ダンカンがいたのです。エレーヌは、主治医の一人娘として可愛がられ、弟子となり舞踊家として成長したのです。

#### ◆ 「埋められた衣裳の思い出」より 現代謡曲全集第14巻「羽衣」1962(昭和37)5.10発行 筑摩書房

彼女にとって、なぜ「生きること」が「踊ること」なのか。それは、彼女が歩けるようになるかならないぐらいの頃から踊りをやってきたからである。(略)

彼女（イサドラ・ダンカン）は自分の行く先々で子供を養子にするので、少なくとも12人ぐらいの子持ちで、彼らが歩けるようになると踊りを教えるのだった。エレーヌはダンカンの養子になったわけではないが、（エレーヌの）父が死ぬまでの間、そこの子供と一緒に暮らしたので、踊りが生活の一部になってしまったのである。

彼女は父の死後、勉強して物理の教師になったが、劇場や舞踊が彼女をそうさせておかないので、教職をはなれ、デュランやジャン・ルイ・バロオやマルセル・マルソオと舞台に立った。私が彼女を知ったのはそのころである。(略)

エレーヌは生きた「羽衣」を演じたがった。

なぜ「羽衣」かというと、その主題は私たちの知っていた能のなかで最も一般的なもので、ヨーロッパでもいろいろな伝説のうちに見出だされる、あらゆる夢の中にある主題だったからである。

#### ★ エレーヌとマルセルとの出会い ～ 彼女とわが子の死 ～ 続き

レジスタンスとしてドイツ軍と戦い、何年もの監獄生活の後、解放された私は、目も、耳も、頭脳も飢えたように全てのものを吸収していました。そんな時、出会ったのがエレーヌでした。彼女の美しさ、何よりもその聡明さ、舞に打ち込む情熱。私はエレーヌと生活を共にし、彼女を支えてきました。

天女が羽衣をまわって空から降りてくるというストーリーは世界各国にあるもので、スペインのサンチャゴ教会では彫刻にもなっています。彼女はフェノロサが書いたイタリア語の本と、もう一つ日本の羽衣の物語を読み、大変感動していました。何とかこれを舞ってみたいと資料を探していましたが、当時は日本の大使館も領事館もなく (略)

1949年、東洋学者ルネ・グルゼ氏の招きにより、ギメ美術館での初演を迎えました。この公演はポール・クローデル氏はじめ、5人の元駐日フランス大使館員の後援により行われました。300席しかないギ

メ美術館の古いホールには、1,500人が押し寄せると反響は大きく、多くの人に見てもらうために椅子を取り外したりしたのです。(略)

羽衣の上演が大成功をおさめ、ユネスコ本部や病院での公演を重ねていたある日、エレヌは過労のため体調を崩し、上演中の舞台上で倒れました。同時に、妊娠していることも分かりました。医師の診断によると、血液のガン、白血病だと言うことでした。彼女の血液型はRH マイナスという珍しい型で、生まれてくる子供の血液を全部正常な型の血液に入れ替えなければならず、母体のために子供の命を諦めるか、自らを犠牲にしても子供を産むかの2つに1つの選択を迫られました。彼女は、子どもを産みたいと言いつ張りました。疲れた身体で、毎日病院までの道のりを2時間掛けて治療に通いました。貧しくて、電車賃もなかったのです。

やがて、母親と同じ血液型の子供が生まれましたが、生後間もなく世を去りました。葬式は私一人で行いました。誰にも知らせずに。それに続き、エレヌも入院することになってしまいました。後にフランス大使になった萩原徹さんが、日本がユネスコに加盟を承認された日(1951年7月2日)、「羽衣のために」という言葉を添えた花を一杯抱きかかえてお見舞いに来てくださいました。

それまで私とエレヌは一緒に暮らしてはいましたが、結婚式もあげていませんでした。彼女は式を挙げ、正式な夫婦になりたいと希望し、病院で医師と看護婦の2人だけの立会で私たちは夫婦となりました。本来2つあるべき指輪も安い物を1つだけ買い、今でも大切に持っています。

彼女は最後に、「精魂込めて舞い続けた羽衣の物語の舞台である三保というところへ、是非一度行って欲しい」と私に言い残して息を引き取りました。1951年(昭和26)7月11日の事でした。看病疲れと愛する人の死がこたえて私自身も病気となり、エレヌと同じ病院、奇しくも同じ病室に入院することになりました。その時、萩原徹氏より連絡があり、同盟通信を紹介され、日本に来るのであれば3か月間面倒を見てくれると約束してくれたのです。私は勤めていた経済新聞を退社し、朝鮮戦争(1950年6月25日～)の従軍記者を条件に他の新聞社に移籍し、エレヌの遺髪を持ってパリを発ちました。彼女が亡くなって3ヶ月後のことでした。そして2ヶ月の船旅の後東京に着いた私は、さっそく三保を訪れたのです。以来31年に亘る在日生活の、これが始まりになろうとは思ってもみないことでした。

◆ 「埋められた衣裳の想い出」より 現代謡曲全集第14巻「羽衣」1962(昭和37)5.10発行 筑摩書房 続き

「羽衣」で用いる羽毛の衣裳の一つが、現在もなお、フランスの西、ブルターニュのプレヴノンという、大西洋に突き出た村落の、小さな墓地に埋められた柩の中に納まっている。海に臨んで波音が聞え、松に覆われたその墓地に風が吹きつける。

この「羽衣」の衣裳は、私の妻だったエレヌが着ていたものだ。妻はこの衣裳に包まれて葬られた。それが死の床の二つの願いの一つだったからである。他のもう一つの願いは、私が日本に行き、三保の松原を訪れ、また日本で上演される「羽衣」を見たりして、もし気に入ったならば日本に住むということだった。この二つの願いは、二つとも叶えられた。

1991年(平成3)10月、マルセル氏はエレヌが能公演で使用していた能面、衣裳、写真等を清水市に寄贈。現在、清水中央図書館3階に「天女の舞に魅せられて～エレヌ・ジュグラリス遺品展」として展示しています。

エレヌの遺品をより多くの皆さんに見ていただくとともに、研究者の方々のご協力のもとに「エレヌが上演した『羽衣』」が再現できたらとも思います。

### 3 能「羽衣」とは

前出、現代謡曲全集第14巻「羽衣」の「鑑賞と謡い方」で白洲 正子(1910(明治43)～1998(平成10))は、能「羽衣」について次のように解説しています。

羽衣の話は、世界各国に見られる白鳥伝説の一種で、天女もしくは美しい鳥が人間と交わるという

神話は、日本でも多くの物語にとり上げられている。お能の「羽衣」は、それらの物語に、<sup>あずまあそび</sup>東遊の元といわれる駿河国有度浜に神女が降りて舞い遊んだという伝説を加味したもので、世阿弥の作と伝えられるが、おそらくはそれよりずっと古くから行われた古曲を、世阿弥が整理したものであろう。

筋といっても単純なもので、ある日、白竜という漁夫が三保の松原で釣りをしていると、美しい衣を発見する。持って帰ろうとすると天人に呼びとめられ、返してくれと言われるが、彼はなかなか承知しない。ついに、天人の舞とひきかえに返すことになり、天人はそれをまもって美しい遊舞を見せた後、嬉々として空のかなたに飛び去って行くという、一篇のお伽噺である。（略）

白洲正子全集第3巻※ 495頁にも収録あり

#### 4 「羽衣の碑」 建立のいきさつ

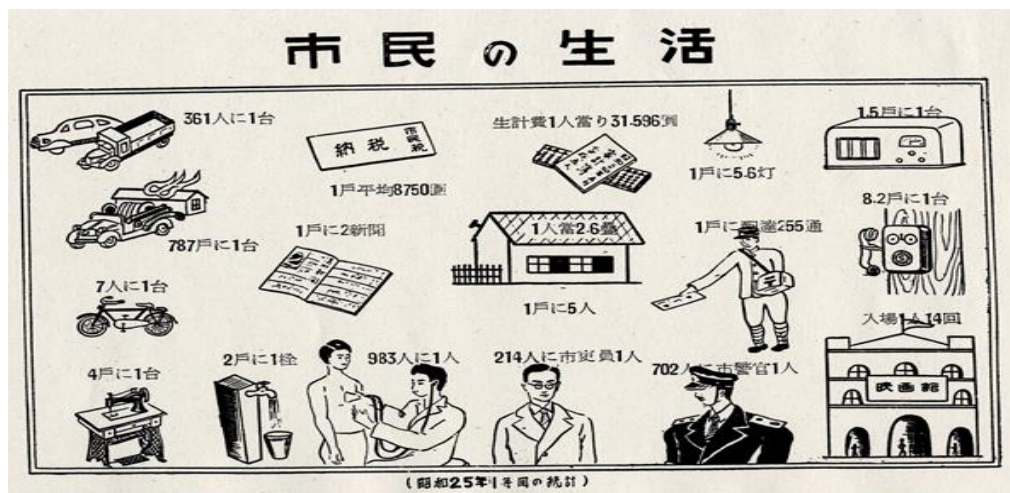
マルセル氏からエレヌ夫人のことを聞いた市民は、心を打たれました。戦後、あらゆることに自信を喪失していた市民は、戦勝国であるフランスの一女性が日本の伝統芸能を愛し生涯を捧げたという秘話に感動し、彼女を碧眼の天女として敬愛しました。そして、多くの市民からの寄付金と、市費 30 万円によって、記念碑が建立されました。

1952 年(昭和 27)は、2 月 1 日、清水港が国の特定重要港湾に指定。またサンフランシスコ講和条約が 4 月 28 日発効するなど、内外ともに大きな転換点となった年でもありました。

##### (1) 当時の清水市

「昭和 26 年度版 清水市勢要覧」※ によると、

人口：88,472 人 男：43,427 人 女：45,045 人 (昭和 25 年 10 月 1 日国勢調査)



「昭和 25 年、文化的水準の指標とされたものは、まずラジオ・電話であり、電灯の数であった。自動車はトラック・二輪車が貨物輸送の中心であり、マイカーは夢のまた夢で、高嶺の花とさえ考えられなかった。

この年の 10 月、日本平は毎日新聞主催の日本観光地百選・平原の部で第 1 位に選ばれた。人々のくらしは観光にも目が振り向けられるようになり、26 年 3 月 7 日には県立公園として県公報に公示されたのである。

(「清水市史 第 3 巻」※ 1986(昭和 61). 8. 22 発行 第 2 編 3 章 1 節 朝鮮戦争特需で活況の清水 626～627 頁)

##### (2) 記念碑建立に向けての山本 正治清水市長の奔走

記念碑建立への市助成金の支出にあたって山本正治市長は、「これを出さしていただくことで、(日仏羽衣) 協会に一つ力を与えていきたいという考えだ。・・・協会の様々な今後の活動に力を与えてやる意味でお願いをしたい」と、この事業に積極的に取り組む姿勢を示していました。

(昭和 27 年 3 月 25 日 清水市議会 本会議での質問 森頼太郎議員への答弁  
「清水市議会史第 5 巻」※ 編纂発行：静岡市議会 2009(平成 21)1 月刊

記念碑のデザイン等についても、山本市長自らが奔走し、決定したことが記録に残されています。  
完成した記念碑は、朝倉文夫氏の構想によるもので、岡山県産の御影石に朝倉響子氏作のレリーフをはめ込み、「羽衣の碑」の題字は高塚竹堂氏が揮毫しました。

1952年（昭和27）5月6日 和田英作氏日記より

「山本市長の依頼で、羽衣エレヌ碑建立についてマルセル氏（エレヌ夫）、朝倉文夫氏（彫刻家）と懇談する。」 洋画家の和田英作氏は、前年8月、「富士を描きたい」と三保に移り住んでいました。

1952年（昭和27）11月1日 「エレヌ碑除幕式及び演能「羽衣」に臨席。」

（和田英作 年譜（作成：岡部芳雄氏）より 季刊「清水」第34号※ 特集 和田英作 1997年（平成9）11月発行）

1952年（昭和27）10月29日 静岡新聞 朝刊 「羽衣の碑着工の記事」

1952年（昭和27）11月2日 清水日報 夕刊 「エレヌジュグラリス記念碑除幕式の記事」

また、「清水市勢要覧 昭和28年度版」（1953年（昭和28）9月刊）※ には、三保の松原とともに、新たに「羽衣の碑」の写真を掲載。観光の項で碑を紹介し、碑を観光振興の柱にする意図がうかがえます。

## 5 1952年（昭和27）11月1日（土）除幕式

### 式次第

- |               |                         |
|---------------|-------------------------|
| 一 開式の辞        | 六 経過報告                  |
| 二 フランス・日本国家斎唱 | 七 感謝状贈呈                 |
| 三 除幕          | 八 祝辞                    |
| 四 献花          | 九 謝辞（映像ではこの後、黙とうのシーンあり） |
| 五 式辞          | 十 能上演                   |

1952年11月2日 毎日新聞 朝刊は、「青空の下『羽衣』の能 ジ夫人碑除幕式 きのう三保松原を彩る」の見出しと写真とともに、式の様子を次のように伝えています。

「・・・除幕式は菊花香の快晴の1日午後1時から、ゆかりの地清水市三保松原で日仏羽衣の会協力会員はじめ知名士300余名が列席、盛大に挙行された。

定刻飯島市議会副議長の開式の辞、清商高プラスバンドの伴奏で日仏国歌合唱ののち、地元三保小学校5年生遠藤京子さん(11)がレリーズ作者朝倉響子さんの補導で除幕、佐藤パリ会長、山本清水市長、夫マルセル・ジグラリス氏らの献花に次いで、山本羽衣協会会長から約40分にわたり「・・・芸術を通じ日仏親善に大きな足跡を残した故人の霊に感謝と追慕の心情をささげる」旨の式辞があり、朝倉響子さん他工事関係者に対する感謝状贈呈の披露三保松原の清掃愛護に努めた三保子供会表彰が行われ、ドジャンフランス大使、佐藤パリ会長、斎藤知事、稲名清水市議会議長らの祝辞があって、最後に夫君マルセル氏から別項の謝辞を述べ、閉式。午後2時半から仮設青天井の舞台上、三保松原や富士山を背景に約1時間30分にわたり、能狂言はじまってから空前絶後といわれる梅若万三郎氏一門20名の「羽衣」が一般に公開され夕刻5時すぎ滞りなく終了した。」



### ジグラリス氏謝辞

「きょうはほんとうにありがとうございます。エレヌの代わりにあつくお礼申し上げます。エレヌが三保にあこがれたのも古い日本文化を育てた国際的な関係でしょう。美しい羽衣の伝説が生まれたことは偶然でない、詩的な美しい環境からです。（略） こんな大きな催しをしていただいた機会に芸術に、社会的に日仏の文化交流がますます伸びることを望みます。清水の皆さん本当にありがとう。」

### フランス文化友の会結成へ

「除幕式に参列したフランス総領事エドワード・ユット氏は同日増田静岡市長と会見、フランス文化の紹介普及のため、フランス文化友の会の結成とフランス文庫の設立を依頼、同市長も実現に努力することになった。」

★ 1984年(昭和59)5月10日 夏目 四日二(しかじ)氏との対話より抜粋  
羽衣まつり二十周年記念誌※ (2003年(平成15)10.10 発行)より

そして多くの方々のご好意により、三保海岸の富士を正面に見る松林の中に、エレーヌのモニュメントを建てることになりました。来日する前、随分能の本を読み、また、パリで知り合った在仏20年の読売新聞記者、松尾邦之助氏の紹介もあり、各流の謡の師と知り合いになることができました。中でも、この話に感激された梅若万三郎師は無料で出演を承諾され、モニュメント完成を機に、野外能「羽衣」が実現したのです。

1952年11月1日、私はエレーヌの遺髪をモニュメントの中に埋め、フランス大使を始めとする多数の観客を前に正式の羽衣の舞が舞われたのです。能舞台に要した費用は、危険の伴う従軍記者として溜めたお金の一切をはたいて私が負担し、日本に来たとき同様、無一文になっていました。しかし、エレーヌの遺志を果たした気持ちで、決して後悔することはありませんでした。(マルセル氏:30歳)

## 6 「羽衣の碑」の顕彰事業 その後



年代不明 写真提供:羽衣ホテル

「羽衣の碑」建立が1952年(昭和27)。

そして第1回フランスフェア羽衣まつりの開催が1984年(昭和59)。

この32年の間、羽衣の碑前では、毎年「羽車神社」(御穂神社の離宮)の秋の祭礼の際に、「エレーヌまつり」が三保の市民の皆さんにより開催され、顕彰事業が絶えることなく続けられてきました。

## 7 この映画が作られたきっかけ ~マルセル氏と音楽:三木鶏郎氏 編集:伊勢長之助氏との出会い~

ではこの映画は、どのようなきっかけで、誰の手によって作られたのでしょうか。

ここに、(株)図書新聞発行の週刊図書新聞 1953年(昭和28)2月14日(土)があります。そこへ音楽家の三木鶏郎氏が、コラム「今よう羽衣物語 マルセル君と恋女房」を寄稿し、この中で

- ・ 鶏郎氏が伊勢長之助氏と銀座でばったり会って飲んだ折に、来日したばかりのフランスの新聞記者マルセル氏の話となり、そのファンタスティックなロマンスに心を動かされたのが、最初のきっかけであること
- ・ 映画は、マルセル氏の私費で作られたこと。音楽・編集・撮影は、ほぼ無報酬だったことが、ユーモアたっぷりに語られています。

×月×日

旧日映ニュースの名編集者伊勢長之助氏(通称イセ長)と銀座でばったり合って飲んだ所、彼が最近知り会ったというフランスの若い新聞記者マルセル・ジグラリス君のことについて話の花が咲く。マルセル君は日本を中心に朝鮮、台湾とマタにかけて極東を飛びまわっている、いわば特派員である。約一年前日本行を志して、現れたばかりなのである。何故日本を志したかという曰くインネンが面白いー面白いといっは失礼だが、書き方によっては当代マレに見るファンタスティックなロマンスになる。

M君はフランスにあって一人の恋女房を得た。この恋女房は文字通り『ミメうるわしく才たけて』趣味広く教養高き佳人であつたらしい。らしいというのはボクは会ったこともないし、この佳人今やこの世にないからである。

美人薄命かどうか知らないが、この恋女房病を得て、M君の腕に抱かれながら息をひきとった。かくしてマルセル君の失望落胆は大へんなものだった。恋女房がのこした遺品の中からマルセル君は一枚の楽譜を発見した。それはナント謡曲『羽衣』の採譜だったのである。死んだ恋人は優秀な音楽家だったのである。フランスの音楽家の多くがそうであるようにきっと東洋に興味をもったに違いない。東洋の音楽の中でも最も渋く最も深い謡曲のメロディーとリズムに何ものかを

発見してあの長い全曲を自分の手で採譜したのである。

東洋の一角富士の見える三保の松原に残る天女の幻想的な伝説に魅せられたに違いない。そしてその伝説の中の、羽衣一つ残して天界に飛び去った天女に似て、マルセル君の恋人は一枚の楽譜を残してあの世に昇天したのである。マルセル君に音楽は判らないし東洋に来た事もない。しかし妻が心血をそそいだこの楽譜に真に自分の行先を発見したのである。そこでこの若い新聞記者はなけなしの家財道具をたたき売って（かどうか知らないが、とにかく金持ではない）未だ見ぬ三保の松原にやってきた。『おおハゴロモの松！』

×月×日

(略)

さてそのイセ長の映画の話というのはこういう訳だそうだ。

このいわば『智恵子抄』にも『天の夕顔』にも似た単純でひたむきな愛情の物語は各方面に強い感動をよびおこした。そしてこの恋人の羽衣に対する讃歌（オマージュ）がとうとう石碑となって、羽衣の松のそばに立つことになった。そしてその除幕式には羽衣の本家のウメワカ氏がオープンの舞台でこれを演じたとある。そしてこの日を記念して除幕式前後の状況がごく短い映画にとられてフランスにおくられてゆくことになった。この映画製作を奉仕的にひきうけたのがイセ長である。

×月×日

問題のイセ長氏の映画の録音にボクが一役買うことになって、スタジオに出かけた。それまでボクはマルセル君とは一面識も、なかった。ウスギタないニュース映画の録音スタジオに現れて、オンボロピアノ一台前にこしかけたムクツケキ東洋の男の子にマルセル君はあまり期待を抱かなかつたらしい。所がこのムクツケ氏一たびピアノのキーに触れるや、シンインビョーポーなんて当人が言っっては手前ミソで鼻モチならないが画面にうつっている三保の松原と、ボクが奏き出した全音階のアルペジオが、このボロピアノとマッチして、まことにエモイワレヌ音を出した。チェンパロともチターともつかず、日本の琴に似てアイマイモコ、まことに立派な伴奏となった。この不思議な幻術にマルセル君は東洋の神秘を感じたのかもしれない。驚喜してボクにとびついて来た。

しかも暁星以来初めてのフランス語に答えるボクの電報のようなポツポツした片言まじりのフランス語が更にこのアイマイモコを助長したに違いない。二人はとにかく瞬間に友達みたいになった。

次なる場面はこのみんなでノムことになる。所は我家である。ボクのピアノの伴奏でマルセル氏が得意のパントマイムを紹介する。やせっぽちで体のよく動くマルセル君は、ジャーナリストの感覚を交えて、吉田首相からジャン・ルイ・パローの真似まで踊ってみせる。これは一ぺんテレビに出したいと思う位絶妙なもので、一緒にいた人々が抱腹絶倒であった。(略)

1953年(昭和28)2月14日(土) 週刊図書新聞※ 5面 学芸欄 コラム 私の日記

1989年(平成元)5.20 発行 復刻版図書新聞 第1回配本※ 33頁に掲載

このように、亡き妻エレヌを追慕するマルセル氏の「『智恵子抄』にも『天の夕顔』にも似た単純でひたむきな愛情の物語」は、各方面に強い感動をよびおこし、地元清水市では記念碑建立が動き、除幕式当日の能「羽衣」の上演は、梅若宗家が無報酬で出演。そしてこの記録映画も、構成作家・作曲家の三木鶏郎氏(当時39歳)が音楽を、編集の神様「イセ長」(当時40歳)が無報酬で引き受けて作られました。

## 8 マルセル・ジュグラリス氏のこと Producteur

1922(大正11)6月19日	南フランスのニースに生まれる。
	ソルボンヌ大学で歴史と地理の学士号を取得。サン・シール陸軍士官学校在学中に第二次世界大戦が勃発。
~1945(昭和20)	大戦中に仏警察の手で逮捕投獄されたが脱獄し、レジスタンス運動に参加。その後再びイタリア憲兵隊に捕えられ、軍法会議で死刑宣告を受ける。独ゲシュタポの手に渡され、ノイエンガム捕虜収容所で解放される。(22歳)

1945(昭和20)～	終戦後、ジャーナリストとなり東欧、チェコスロバキアへの特派記者として冒険的ルポルターージュを発信。
1951(昭和26)～1952	エレーヌと結婚。彼女の死。11月来日。羽衣の碑除幕 (30歳)
	朝鮮戦争、インドシナ動乱へ特派。北ベトナムのパン・ムン・ジョム休戦会議、マニラでのSEATO条約締結を報道。1961(昭和36)には、極東シベリア地方からルポを発表。 1962(昭和37)、ハノイに成立した北ベトナム政権の初期の動向を、西欧新聞人で初めて、軽妙な筆で報道。 1965(昭和40)、中国に入り、ワシントンに現れ、夏、米太平洋艦隊に仏ソワール紙特派員として招かれ2か月半、海上で取材。 1966(昭和42)9月、仏ガリマール社から「L' Escalade」(邦訳「北爆」-ベトナム戦争と第七艦隊- 訳者:松尾邦之助 現代社)として刊行。
	1956(昭和31)、「日本映画 1896-1955」を仏セール出版社の第七芸術叢書の一冊として刊行。(外国人によって書かれた最初の映画通史) 1959(昭和34)、仏映画の海外宣伝機関のユニフランス・フィルム駐日(極東)代表に就任。20年余にわたる在職期間中、仏映画祭の開催、パンフの定期刊行により仏映画の紹介につとめた。 日本映画のカンヌ国際映画祭出品に積極的に協力。衣笠貞之助監督:「地獄門」、市川崑監督:「おとうと」、浦山桐郎監督:「キューポラのある街」、小林正樹監督:「怪談」等の名作が、毎年のように出品された。
1982(昭和57)	定年のため離日(在日31年) (60歳)
1984(昭和59)5月	来日。夏目 四日二氏との対話(名古屋市内のホテルロビーにて) 10月、第1回仏フェア羽衣まつり 能「羽衣」が32年ぶりに復活。
1991(平成3)	第8回仏フェア羽衣まつり。エレーヌ夫人没後40年に出席。エレーヌ夫人の遺品を清水市に寄贈。(69歳) 特別番組「パリに舞い、羽衣に眠る」がフジTVで全国放送される。
1994(平成6)	川喜多賞 受賞
2004(平成16)	旭日中綬章 受賞
2010(平成22)2月5日	パリで死去 (87歳)

1952年(昭和27)以降、エレーヌの遺志を果たしたマルセル氏は、日本を拠点に国際ジャーナリストとして、フランス映画の日本への紹介、日本映画のカンヌ国際映画祭出品への協力など、多方面で活躍を続けてきました。

ジャーナリストとしてのマルセル氏を「北爆-ベトナム戦争と第七艦隊」の「訳者あとがき」で松尾邦之助氏は、

「・・・英・伊・ロシア・スペイン語はおろか日本語まで流暢にしゃべる彼は、天才的ポリグロット(多言語話者)であり、驚くべき繊細な感覚と、明晰な頭脳の持主で、南フランス人独特の想像力と、辛辣皮肉なユーモアを身につけた異色のジャーナリストである。この点、日本のおしなべてのジャーナリストとは



1952年(30歳) 写真提供:羽衣ホテル



全く違っている。・・・以上述べたような波瀾と冒険に満ちた彼の生涯は、彼を哲人にし、そうした風格が淡々として、時には急テンポの筆で描写されたルポタージュの行間に、いい知れぬ人間味を滲ませている。千紫万紅の地中海岸南仏生まれの彼には、何ともいえない明朗さとともにラテン系の人間特有の憤怒百愁の正義感としての情操があり、それだけに、このルポタージュは、単なる知識の倉庫としてではなく、あくまで人類の非を通させまいとする純情詩人の記録として興味が深い。」

と評しています。この間、マルセル氏は、公式には1991年(平成3)の一度しか三保を訪れていません。なぜか。

再び、夏目氏との対話から

★ 1984年(昭和59年)5月10日 夏目 四日二(しかじ)氏との対話より  
羽衣まつり二十周年記念誌〔2003年(平成15)10.10 発行〕※

ドイツの監獄に13,600人が入れられ、生きて帰れたのは僅か600人でした。このうちの誰一人として苦しかった監獄生活を語る人はいません。エレーヌのことも同じです。すべては終わったのです。後は、別の人生を送らなければならないのです。今は、現在の妻と静かに2人で暮らしているのですから。三保にエレーヌのモニュメントが出来、20年、30年の記念日にいつもお招きを受けていますが、行くことはありません。エレーヌを忘れた、いえ、忘れたいのではないのです。私は“エレーヌのお守り”を、肌から離れた事はありません。この小さな日本のお守り袋には、彼女の遺髪、結婚指輪、墓石の一部と三保の伯良神社のしめ縄の一部を入れてあります。これがエレーヌの全てなのです。彼女は常に私の胸の中にあるのです。ただ、区切りをつけたいだけなのです。

能は、確かに一つの脱線だったのでしょうか。私たちはその横道に踏み迷い、生命を、そして授かった子供の命までも注ぎ込んだのです。もう決して後戻りはできません。しかし、その後日本がもたらしてくれた全ての事柄、あの三保の浜辺、風や、松や、砂の上の小石。横道にそれたことを私は、少しも悔やんではないのです。

## 9 音楽：三木 鶏郎氏のこと

## Musique



三木 鶏郎(とりろう)(1914.1.28~1994.10.7)氏は、東京生まれ。作詞家、作曲家、放送作家、構成作家、演出家 CMソングの生みの親で、ジャズ評論家の三木鮎郎氏は実弟にあたります。

東京帝大法学部卒業の秀才で音楽少年。復員後、ラジオ番組作り、三木鶏郎楽団を結成するなど多方面で才能を發揮しました。

1951年 民放始まり日本初のCMソング「僕はアマチュアカメラマン」ヒットの頃(37歳)。

写真提供：三木鶏郎企画研究所

「昭和22年に『日曜娯楽版』という番組が登場しました。これが大人気。聴取率100%。つまりラジオを持っている人全員が聞くということが起こったんです。世の中を風刺したコントがあって、短い音楽が入って、またコントがあってという構成です。・・・日本のバラエティーは、この番組から始まったんです。この番組を仕掛けたのが、音楽家で構成作家でタレントの三木鶏郎。僕にとっての師匠です。・・・」

コントの合間に入るテンポのいい音楽が鶏郎さんの真骨頂。アメリカ式です。「冗談音楽」といいました。日本人には新しく、鶏郎さんのもとには、俳優の三木のり平、中村メイコ、ジャズシンガーの丹下キヨ子といった面白い人たちが集まっていたんです。」

「月刊サライ」 2012年9月号※ 特集「永六輔が語る愛しのラジオデイズ」94～95頁より

作曲したCMソング

- ・ミツワ石鹼（現：ミツワ石鹼株）「ミツワ石鹼 ～ワ、ワ、ワ、輪が三つ～」
  - ・松下電器産業（現：パナソニック）「明るいなショナル」
- ほか、膨大な作品群が、三木鶏郎企画研究所で承継・保存されています。

三木鶏郎企画研究所にお願いし、この映画を見ていただいたところ、バックに流れているピアノソロは、鶏郎氏が繁田裕司（本名）時代に書いた歌曲の作品を彷彿とさせるメロディーで、鶏郎氏の思い入れのあふれたもの。ピアノは、鶏郎氏自身が弾いており、貴重な音源であることがわかりました。

## 10 編集：伊勢 長之助氏のこと Realisation

伊勢長之助(1912年(明治45)2.25～1973年(昭和48)1.1)氏は、新宿区出身の映画編集者、映画監督。

老舗の呉服店に生まれ、中学時代から映画を作り、慶應義塾大学経済学部在学中は映研で活動。1935年(昭和10)に卒業後、PCL(写真化学研究所、東宝映画の前身)から東宝の文化映画部に入社、製作総務に勤務。1941年(昭和16)、日米開戦で日本映画社に統合され、ジャワ特派員になり国策映画に携わりました。戦後、日本ニュースの編集に加わり、その後フリー。

31年以後ドキュメンタリー映画「カラコルム(1956)」、「黒部峡谷(1957)」、「南極大陸(1957)」(以上3篇、日本映画新社製作)、「ミクロの世界」、「日本万国博」などの名作を製作しました。

「佐久間ダム」(岩波映画・1955)で日本映画技術賞(昭和29年度)を受賞。当時の産業映画の編集のほとんどを手がけ、その豊富な経験と卓抜した技術によって業界人から「編集の神様」とも称され、戦後の記録映画の編集に多大な影響を残しました。主な監督作品に「瀬戸内海(1959)」、「マッキンレー征服(1960)」等。



写真提供：いせフィルム

「『演出とシナリオの真意をくんで、フィルムを取捨選択し、順序と長短を考えてつなぎ合わせ・・・。ほんとうは、作品を生かすも殺すも編集ひとつなんですね。どうもこの点の認識が足りないんで困ります。』

作品の題材を“百科全書的”といわれるほどよく調べあげるのが有名だ。『現場に行けなかった探検ものなら、本を読み、カメラマンから話を徹底的に聞いて、ぼくのイメージをたしかめる・・・記録映画が、現実と違うものをつくりあげたら、作品価値はゼロですからね。』・・・またこの人の画面のつなぎかたはテンポが快適で、映画音楽をつけやすいと作曲家たちはいう。」

インタビュー 「教育映画祭で技能賞を受けた伊勢長之助」

1964(昭和39)9月5日(土) 朝日新聞 朝刊※

長男の伊勢 真一(ヒューマンドキュメンタリー映画監督(1949年1.29～)は、

「父・伊勢長之助は、戦前・戦中・戦後を通じてありとあらゆる受注仕事(PR映画)を手がけた構成・編集者だった。(略)正確に調べてはいないが、おそらく1,000本を超すPR映画を創ったのではないだろうか・・・。(略)

父の死後、映像の世界に飛び込んだ私にとって父は、初めは疎ましい存在であった。しかし、父に育てられたという何人かの先輩映画人に、その仕事振りを伝え聞き、遺された作品を見て、敬愛する存在へと変わっていった。父のように仕事ができる男、優れた映像の職人として認められたいという気持ちが、私をモーレツに仕事に駆り立てたのだ。(略)

PR映画はどんな傑作でも、一般の観客の目に触れることがほとんどない。父が創った膨大な数の作品も、もちろん私の作品も、ほとんど見られることなく忘れ去られている。

ほとんどのPR映画の創り手は、人知れず仕事をし、そして無名のまま消えていくのだ。まあ、映像の仕事に限らず、どんな仕事もそうかもしれないし、それでいいとも思う。

父は、1年365日、ほとんど休まず編集機の前に座り続け、PR映画を創り続け、借金を残して死んだ。私はここ数年、父と同様に、365日ほとんど休まずに仕事をするようになった。けれども1日だけ必ず休む日がある。12月31日、大晦日だ。その日は正月元旦に逝った、父の墓参りをするからだ・・・。

今もまだ、父のような映像の職人でありたい、という想いが、私を仕事に駆り立てている。」

と記しています。

シリーズ日本のドキュメンタリー第4巻 産業・科学編 ※

「父・伊勢長之助のこと、PR映画のこと」伊勢真一氏 58～66頁より

2010年(平成22)8.27 発行 編著者：佐藤忠男 (株)岩波書店

## 11 撮影：八幡 治夫氏のこと *Prise de vue*

### (1) 八幡治夫氏のこと

「八幡 治夫さんは岩波映画のベテランカメラマンでした。

『お伊勢参り』（第1回日本観光映画コンクールグランプリ）で(父と)仕事を共にしています。もっと多くのPR映画をコンビで創っているはずですが…？」 伊勢真一氏より

#### 主な撮影作品

- ・「魚の愛情」1947年(昭和22) 18分 35ミリ 白黒 1947年第1回 日本映画技術賞(撮影)を受賞
- ・「打撃王・ディマジオ」1950年(昭和25) 白黒 日映製作 演出：伊勢長之助
- ・「お伊勢参り」1953年(昭和28) 監督：伊勢長之助

『三木のり平と小野田勇の弥次喜多コンビがお伊勢参りをする、という喜劇仕立ての作品で軽妙な演出、編集に伊勢長之助の体質がよく出ていると思う。「映画はリズムだ」「映画は面白くなければいけない」が持論だった父は「伊勢長之助はいい職人だけれども、思想がない・・・」と時々批判されていたらしい。リズムも面白いことも立派な思想だと私は思うけど、やたら女の人を撮ったカットが多く、主人公が盛んに女性にちょっかいを出すという演出も、父らしいか。』

ブログ「(伊勢真一)監督のつぶやき」 2005年(平成17)4月より

- ・「パリからの手紙」1957年(昭和32) 白黒 51分

### (2) この映画で果たした撮影者の役割

除幕式当日の撮影記録は残されていないようですから、以下は想像の域を出ませんが。

- ① 寄贈されたフィルムは35ミリ。撮影も決して軽いとは思えない35ミリカメラで撮影。
- ② 除幕式は13：00から17：00の4時間。この間の一発勝負の撮影。
- ③ カメラ1台につきカメラマン1名と助手2～3名 計3～4名 2台なら倍人数。
- ④ 録音が最低1名 照明スタッフはなしか。
- ⑤ 当日、マルセル氏は主賓の被写体。編集の伊セ長が会場に来ていなかったとすると、撮影プランに従って現場を指揮したのは、撮影の八幡治夫氏が。
- ⑥ 現存するオリジナルフィルムは、旧清水市に寄贈されたものと梅若宗家に寄贈されたものの2本。

映画冒頭のフランス語のナレーション入りのフィルムをまず1本作り(マルセル氏と伊セ長で)、マルセル氏はこれをフランスへ持ち帰り、(野外)「能」の紹介・PRをするつもりだった

のではないか。 「その除幕式には羽衣の本家のウメワカ氏がオープンの舞台でこれを演じたとある。そしてこの日を記念して除幕式前後の状況がごく短い映画にとられてフランスにおくられてゆくことになった。」前出 三木鶏郎：「今よう羽衣物語 マルセル君と恋女房」

このナレーションを日本語訳し、冒頭の日本語序文を加えたフィルムを清水市と梅若宗家へ寄贈。とすると、マルセル氏の伝語ナレーションを訳した(日本人)スタッフがいるのでは。

## 12 マルセル氏の死

### (1) 離日にあたって

1982年(昭和57)、31年間の滞日生活に終止符を打ったマルセル氏は、その後幾度となく来日していますが、離日にあたってマルセル氏は、

1982年(昭和57)8月21日(土)、読売新聞外報部 山田寛氏のインタビュー記事“フランス人記者の「日本30年」”で次のように語っています。

「文化交流、相互理解の促進こそ、半生をささげた仕事だったわけだが、『日本製品ではなく、人を通じた理解をもっと進めなければ』と力説する。それには『日本人、欧州人一人一人が、互いに少なくとも一人の友人を持つことだ。日本人、欧州人を離れ、ただ二人の友人になる — そんな友情で結ばれたら、問題解決は今よりずっと容易になろう。』(略)

今後もルポワニ誌特派員として、二回程度カバー・ストーリーを書きに来る。また日本株式会社への投資を目的とする日仏合弁会社からこわれ、このほど“名誉職的”社長に就任。これも『経済面からの交流の仕事』と割り切っている。だから、今回の離日も『アディュー』(永遠のさよなら)どころか『アビアント』(じゃあ、またじきに)というわけだ。・・・」

### (2) マルセル氏の死

2010年(平成20)2月5日、マルセル氏は亡くなりました。

日本では、2月15日に産経新聞、20日には読売新聞が死亡記事を掲載。25日には日本経済新聞が44面文化欄「文化往来」で追悼文「日仏映画交流に尽力、ジュグラリス氏逝く」を掲載しました。

「…フランス映画の日本での紹介と共に、日本映画の海外普及に尽力。戦後の日仏映画交流の草分けといえる存在だった。・・・ユニフランスで機関誌編集に携わった映画評論家の山田宏一氏は『東京・有楽町の事務所は日仏の監督をはじめ多くの映画関係者が集まる中心地だった。日本映画をカンヌに推薦した功績も大きい。タフな人だった』と語る。

映画評論家の秦早穂子氏は『ジャーナリストらしい自由な精神、予感する力をもった人だった』と悼んだ。」

また、当時、産経新聞パリ支局長の山口晶子氏は、2010年3月1日、ブログ「パリの屋根の上で」～パリ特派員が綴る取材こぼれ話～ で、マルセル氏の死を次のように悼んでいます。

「・・・ジュグラリスさんはなぜか、正當に評価されることが少ない。アラン・ドロンやイブ・モンタンなどが来日すると、ファンでもみくちやになりながら、空港に迎えに出かけるなど、腰が軽かったので、日本では偉そうにしている人を偉いと思う傾向が強いからだろうか。だが、腰が軽いことこそ、新聞記者の身上ではないか。」

「毎年、健康上の理由から冬場を過ごしていたパリのアパートで最後を迎えたジュグラリスさんの遺体は藍染の粋な着物に包まれ、穏やかな表情を浮かべていた。」

マルセル氏の人間像は、実に魅力的です。今後、ジャーナリスト、映画人としての彼の業績を（ご存命の関係者のプライバシーに最大限配慮しつつ）研究し明らかにしていくことが必要ではないでしょうか。

### 13 おわりに

能「羽衣」が、天人と白竜との出会いと別れの物語であるように、マルセル氏とエレヌ母子の話も、常なるものは何も無いこの世の出会いと別れの秘話です。

この映画が作られてから60年が経ちました。マルセル氏と共に歩んだ人たち、そして、この映画に登場する関係者・市民の皆さん、そして映画の制作スタッフの多くは、すでに亡くなられています。

しかし、この6分25秒の中の登場人物は、まさしく動く絵(motion picture)のとおり、フィルムの中で輝いて生きています。

これらの人たちの想いをいつまでも「忘れない」ことが、この映画という贈りものをいただいたもののつとめであり、最もふさわしい供養でもあると思います。

また、「世界で最もシンプルで完璧な演劇」(エレヌ)である能楽は、2008年、世界無形文化遺産に。そして今、富士山は世界文化遺産に登録申請中です。

エレヌが憧れた富士を望む三保の風景は、今も変わらずそこにあります。

この羽衣伝説に彩られた三保の恵まれた自然と文化に新たな光を。



発見された35ミリフィルム



フィルムの外箱

ご協力いただいた方々（順不同）

- ・ 三木鶏郎資料館 <http://www.mikitoriro.jp/>
- ・ いせフィルム <http://www.isefilm.com/>
- ・ 羽衣ホテル <http://www.hagoromo-hotel.co.jp/>
- ・ 「季刊清水」編集委員会

このDVD・解説に関するお問い合わせは

〒424-0839

静岡市清水区入江岡町15番23号

静岡市立清水中央図書館

TEL 054 - 354 - 1331

Fax 054 - 354 - 0677